

**Knowhow of Editing and Usage of Recorded Teaching
Materials for Language Laboratory,
Using a Mini-Disk Recorder and a Computer**

SHIGERU TAKENO

abstract

This paper reports on the editing of the recording teaching materials for English Language at the Language Laboratory, using a new device (Mini-Disk recorder) , computers and so forth. This is based on the presentation of the LLA (Language Laboratory Association) conference, Kyushu Chapter on June 4th, 1995. The aims of this paper are to present the knowhow of the material editing and to argue the future role of the LL in language learning.

MD(ミニ・ディスク)とコンピュータ利用によるLL教材編集法及び活用法

竹 野 茂

はじめに

この論文は、1995年6月に行われたLLA九州支部大会のLL講習会において筆者が発表したものに加筆したものである。この発表を行うにあたっては、1994年8月神戸で行われたLLAの全国大会ワークショップ・LLコースにおいて発表された流通科学大学の東淳一教授、野村和宏助教授のアイデアを参考にしている。しかし、前記ワークショップにおいては、MD (Mini Disk)という新しいメディアを使っての教材編集にのみ重点が置かれていた。30分という時間的な制約とワークショップという性格からそうならざるを得なかったのであろう。しかし、両氏の音楽用に関与されたデジタル音声機器を英語教育に利用しようとする発想にはただただ敬服するのみである。筆者は、MDを使うことによってデジタル化された音声教材の編集の簡単さに着目し、またコンピュータを利用することによって教材の視覚化も容易に処理できるのではないかと考えた。この2つの要素を組み合わせることによって、とかく多大な時間のかかる教材作りの手順を短縮し、しかも効率よく作業をすることによって、教材自体の内容を充実させ授業における学習効率も高められることを実証しようとした。上記のようなことが実証されれば、敬遠されがちな日常の授業へのLL使用が促進されると確信する。以上のような理由で、筆者は本稿でMDとコンピュータを結びつけた形での教材作りについて論じてみる。

教材作りを取り巻く現状

テレビ技術や衛星放送の発達により、authenticな言語を聞く機会が飛躍的に増えている。テレビでの映画の放映は「吹き替え」から「音声多重放送」にかわり、簡単な操作で英語や他の言語で聞くことができるようになった。また日本ではまだ普及率は伸びていないようであるが、アメリカの放送やビデオソフトにはクローズド・キャプションが入るのは当たり前になっている。(元来、クローズド・キャプションは聴覚障害者用に開発されたものであろうが、語学学習者にとっても有効な学習手段として使えるものである。)

筆者は放送の電波に画像と共にクローズド・キャプション信号を載せて発信する技術が日本でも標準になることを望んでいる。音声多重ができるのだから、クローズド・キャプションの技術もさほど難しいとは思わない。例えば、衛星放送のCNNを本学でも見ることができるが、その放送の中で、時間帯によって、同じニュースの内容を幾つかのパターンで流している。原語のまま、日本語同時通訳付き、日本語字幕付き、英語字幕付きなどがある。

最近もてはやされているインターネットを使えば、VOAやCNNのニュース原稿なども即時に手に入れることができる。

今日、大学の英語教育のみならず、中学校・高等学校レベルの英語教育においても、authenticな英語教材の必要性が叫ばれている。上記のような英語学習者にとってまたとない環境が揃ってきているのであるから、これを積極的に利用すべきである。

しかし、特に中学・高校の教員にとって教科書の消化・課外活動・生活指導を一手に引き受けている教

師にとって自主教材——特にニュース英語のようなリアルタイムの話題を短時間のうちに教材化し授業に取り入れることは至難の業である。実際にこういった実践をされている教員はたくさんいると思うが、相当に苦勞されていることは明らかである。勤務時間後も学校に残り、テープレコーダを何度も聴きながら編集作業・あるいはトランスクリプションの作成と大変な勞力である。いい教材を作る上では避けて通れない苦勞であるが、筆者は最近の発達しつつある機器の使用により、その勞力を少しでも軽減できるのではないかと考えている。

最新の機器の発達はめざましいものがある。かつては理科系の人だけのものと思われていたコンピュータが技術革新と共に万人にわかりやすいものになり、あらゆる職場においても家庭においても一種の文房具の様になりつつある。また録音（音声記憶）技術においても、アナログからデジタルへの移行がめざましい。レコードからコンパクト・ディスク（CD）への移行、カセットテープからDAT・MD、ビデオテープからレーザー・ディスク（LD）への移行、写真・映像の世界においてもデジタル・カメラの出現、紙による出版からCD-ROMなどを使った電子出版への移行など世の中のデジタル化に留まりを知らない勢いである。アナログにはアナログの良さがあるが、デジタルにはそれ以上の利点がある。

編集についていえば、アナログのリソースはリニアにしか利用できないのに対して、デジタルなリソースはランダムに利用できる。編集をランダムにおこなえる機能を十分に使いこなすことによって、教材編集の容易さが生まれてくると考える。

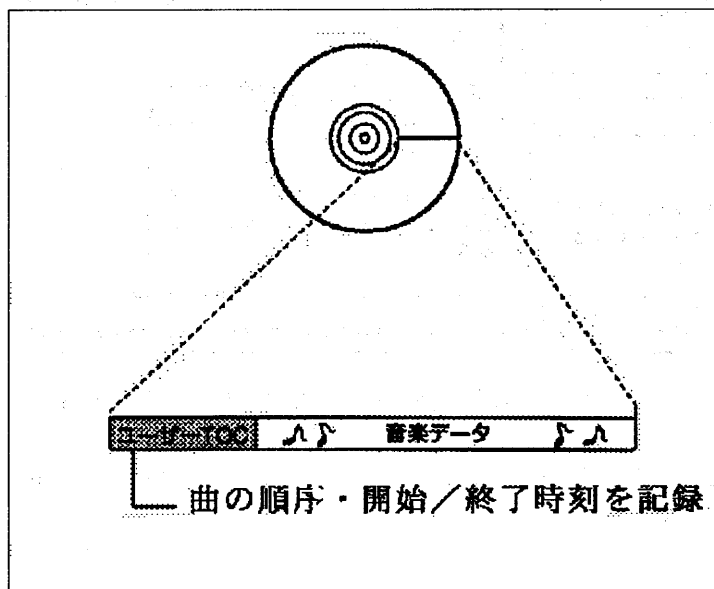
MDの編集機能

MDの編集機能には、大きく分けて以下の5つの機能がある。

1. erase : 録音した音声を消す機能。
2. divide : 録音した音声を分割する機能。
3. combine : 分割した音声をつなげる機能。
4. move : 録音した音声の順番を入れ替える機能。
5. title : 録音したディスクあるいは分割された音声それぞれに名前を付ける機能。

この5つの機能を使い、編集していくのである。

なぜこれらの編集が簡単に行えるかというMDの音声情報管理に秘訣がある。本学で使っているMDの取扱説明書によると、音声の情報を『ユーザーTOC (Table Of Contents)』と呼ばれる領域で管理しているので、このTOCの情報を変更することによって編集が可能」なのである。(下図参照)



MDを使った教材作りの例

本学では2室のLL教室がある。それぞれの教室では8mm-VTR, VHS-VTR, LDプレーヤー, 100インチマルチスキャン・プロジェクターを備えたSONY-LL9000を使っている。業者に依頼し, 外部入出力端子をつけてもらい, これにMDレコーダーSONY-MD101をつないで使っている。その他1教室だけであるがネットワークにつながったApple Computer Centris 650/CD1台を置き, プロジェクターに映し出せるようにプロジェクターの切り替え装置にビデオボードを入れてある。

このような環境の中で, 映画 "The Bodyguard"の一部を使い, MDでの音声編集を試みてみた。映画 "The Bodyguard"のソースとしては, ワーナー・ホーム・ビデオから発売されているクローズドキャプション入りのLDを用いた。編集した教材をどう使うかによって, 編集作業は変わってくる。

ここでは, この映画の主演であるRachel (Whitney Huston)とFrank (Kevin Costner)の二人の会話を使って, ロールプレイができる教材を作ってみようと思う。

(1.0) 編集準備段階

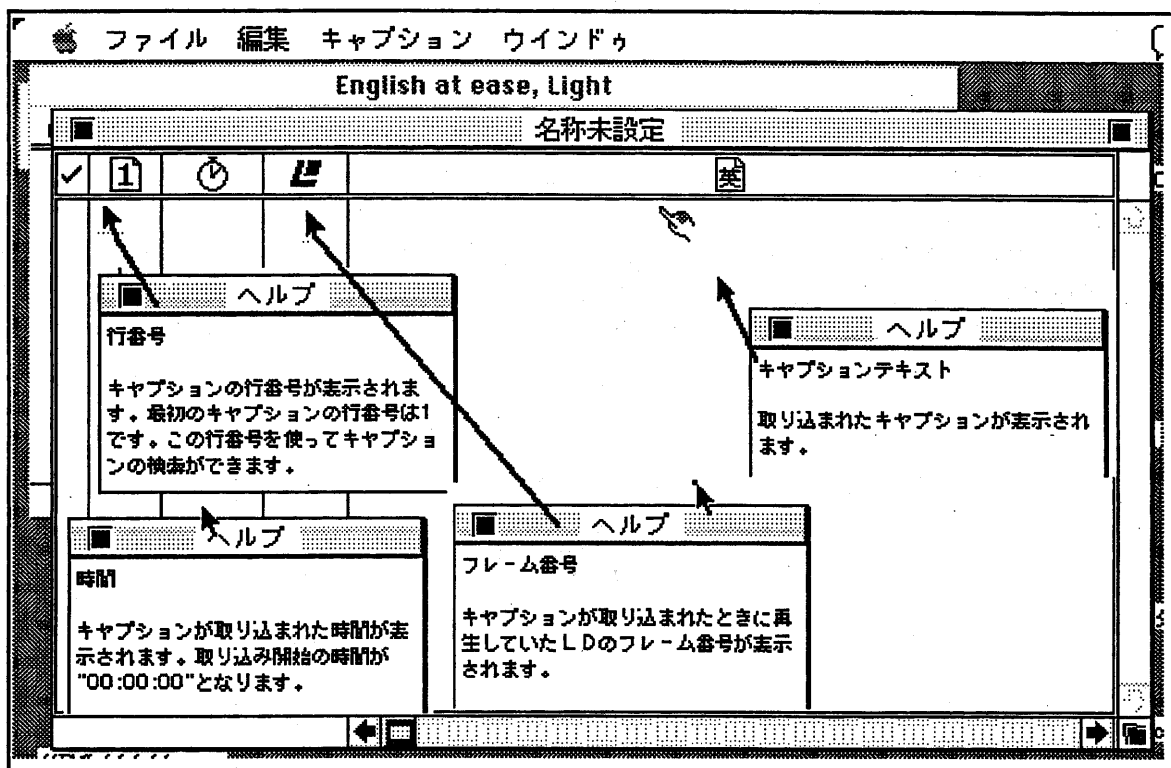
(1.1) LDで「ボディガード」から教材に適切な部分を選び出す。

(1.2) 選び出した部分に, LD側でA-Bリピートマークを付す。

(1.3) MD側で録音準備をし, LDを再生しながら, 録音する。

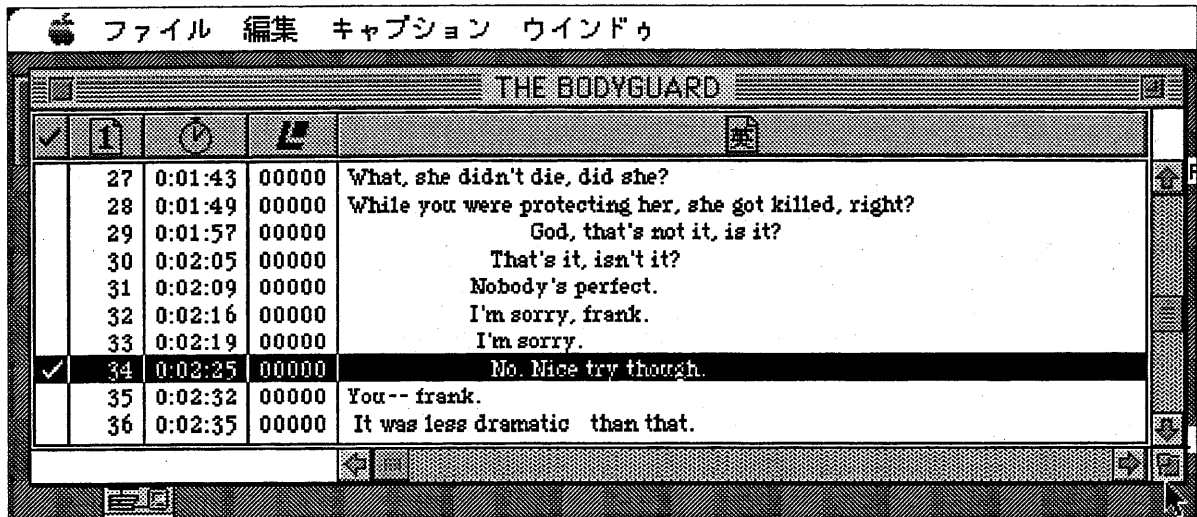
(このときA-Bリピートが効いているので, 好きな回数同じ内容を録音できる。ただし, MDの録音時間は最長で74分に限られている。)

(1.4) コンピュータを起動し, English At Easeというアプリケーションを起動する。



English at ease, light 起動画面及び各コラムの説明

(1.5) (1.2)で設定したA-Bリピート部分(以下シーンAと表す)のクローズドキャプションをコンピュータでテキストとして取り込む。



English at ease, light でのキャプション信号取り込み画面

(2.0) 編集作業 1

(2.1) (1.5) でコンピュータに取り込んだテキストをテキストエディタかワードプロセッサによって加工する。誰の言ったセリフかをチェックする。それぞれのセリフに番号をつけ、各セリフの冒頭に役の名前を打ち込む。MD側で分割するときの番号と一致させるための作業及び学生用テキスト作成の作業である。

(2.2) (2.1) で加工したテキストをもとにMDに録音した音声をdivide機能を使って分割していく。切り間違えた時には、combine機能によりもとの状態に戻すことができる。(一つのディスクで録音時間にかかわらず255番まで番号をつけることができる。)

同一ディスク内でのコピーは残念ながらできないが(シーンAの複写を同一のディスク内で行ってしまうというもので、これができれば同一ディスク内にA-Bの部分が2つ以上存在できることになる。しかし、現時点では、MDの構造上これはできない。)、MDレコーダが2台あれば、光ファイバーケーブルによってクリアな音を損なわず、分割信号も含めて、コピーができる。編集時間の短縮化をねらうのであれば、MDレコーダは2台用意すべきである。(筆者の場合、MDレコーダは1台で行った。)

(2.3) MDレコーダが1台しかないときには、(1.3)の作業で、2回以上同じ会話を録音しておいて、(2.2)の作業を数回繰り返すしかない。しかし、テープレコーダでの作業と比べると音の劣化がなく、MDを2台使用する場合よりも時間がかかるだけである。しかも、テープレコーダを使う場合と比べると頭出しの微調整が簡単で、時間的にも節約になる。

(2.4) 空白部分があれば、erase機能によって、消し去ることが容易にできる。

(3.0) 編集作業 2

(3.1) (2.2) でできたものは、1 Rachel, 2 Frank, 3 Rachel, 4 Frank, ...などと会話が続いているはずである。(後述の参考資料参照のこと。)これをMDレコーダの移動(move)の機能を使うことによって、例えば、Frankの部分の順に後ろに回していき、1 Rachel, 2 Rachel, 3 Rachel, ... 20 Frank, 21 Frank, 23 Frank, ...といった具合にRachelの部分、Frankの部分をもとめて続けたものを作ることができる。

(3.2) 2台のMDレコーダを使うことによって、会話全体を収録したものと、パート毎に分けたものができる。これでマスターMDの録音ができたことになる。

(3.3) (2.1) でできたテキストの加工をする。文字情報を全て与えるのであれば、そのままの形でよい。ディクテーションさせるのであれば、ワードプロセッサによってブランクを作る。単語やフレーズの解説をしようと思えば、それを抜き出して加工しておく。授業者の工夫により、

テキスト加工は異なってくる。

(注1) 今回はデジタル信号を一度アナログ信号に置き換えて、再びデジタル信号で録音したが、LDプレーヤ、MDレコーダの両方とも光デジタル入出力を備えた機種であれば、デジタル信号でデータのやり取りが可能であり、音質もよりよいものが得られるはずである。

(注2) コンピュータが使えない場合スクリーンプレイ出版から出版されているSCREEN PLAYシリーズを使うこともできる。主要な映画のシナリオはこれで手に入れることができる。話題の映画をいち早く取り入れようとするコンピュータとLDの組合せが最も良い。

編集済みマスターMDを使った授業展開例

LL教室において、映画 "The Bodyguard" を使った授業の展開例をあげてみよう。大学での1コマ90分の授業を想定して、展開例を考えてみた。

- I.1 映画 "The Bodyguard" のクローズドキャプション入りLDと前項で編集したマスターMDを用意する。(LDではできれば日本語字幕のないものを用意する。それが用意できなければ、日本語字幕の部分にマスキングができるクローズドキャプションデコーダを使用するのが好ましい。)ワードプロセッサで加工したテキストも用意する。
- II.1 取り上げる映画の概略を説明し、今回取り上げる部分の前後関係を明らかにし、スキーマを与える。
- II.2 今回取り上げる部分の映像・音声を前面の大型スクリーンと各ブースのモニターに映し出して、あらすじを追わせる。
- II.3 単語・フレーズなどを取り上げ、発音練習・意味解説などしておく。
- II.4 マスターMDを使って、全体を画像なしで聞かせる。
- II.5 用意したディクテーション用のプリントによって、ディクテーションをさせる。この際、1文あるいは1セリフを目安にポーズを置きながら、学生のブースに音声を流し、テープに録音させる。音声教材の再生は、全てリモートコントロールのボタン操作によって行う。学生各自がテープを聞き返し、ディクテーションを完成させる。
- II.6 再び全体をLDでクローズドキャプションをオンにし、映像・音声を前面の大型スクリーンと各ブースのモニターに映し出して見せる。



クローズドキャプションを表示中のモニター画面

- II.7 ディクテーションの解答・解説。(静止画でもクローズドキャプションを表示できるデコーダを使えば、画面上での自己チェックが可能。)
- II.8 学生への問いを通して、全体の意味解説。
- II.9 編集したマスターMDを使い、パート練習。リモートコントロールのオートポーズボタンを利用すれば、セリフ毎に一時停止してくれる。再生の再開をする場合は、ポーズボタン又は再生ボタンを押す。この作業と同時に、学生側のブースで録音しておけば、ポーズ入りのテープができ、それを使って、自習をさせることができる。
- 十分に練習させたあとで、LDから画像を流しなら、音声をマスターMDから流すことによって、画面と同期して、パート練習が可能である。(しかし、授業者はヘッドフォンを使いLDから直接モニターしながら、MDのポーズを解除して、音声と画面を同期させるという高度な技術を要する。操作はある程度練習次第でうまくいく。失敗してもともと位の気持ちでやってみると意外と学生は喜ぶと思う。成功すれば、学生自身が画面の中の俳優になったような一種のvirtual realityを経験することができる。問題点は、学生の練習が十分でないとポーズは意外に短いので、ポーズの時間内にセリフを言い終われない。テープを持って帰らせて、十分に練習をさせた上で、次回にやってみるという手もある。)
- II.10 LLのペア学習機能を使い、学生同士のパート練習もできる。
- II.11 ターゲットセンテンスの練習。(音声提示はマスターMDを利用する。瞬時に頭出しが可能。)
- II.12 再度LDを使い、クローズドキャプション及び字幕なしで画像・音声を前面の大型スクリーンと各ブースのモニターに映し出して見せる。
- III.1 LLのアナライザーを使って、映画の理解度を5段階で自己評価させる。
- III.2 セリフに使われた単語・イディオムクイズを多肢選択法でアナライザーを使って、答えさせる。
- III.3 ターゲットセンテンスを利用した口頭作文を数名の学生にさせる。ヘッドフォンマイクを利用し、他の学生にもモニターさせる。
- IV.1 今回のまとめ
- IV.2 次週までの課題の提示。

これは、ほんの一例であり、アイデアの羅列であるので、授業の時間長短によって、学習内容の取捨選択をして応用してもらいたい。

筆者は、"The Bodyguard"のLDを使い、1993年7月、1994年7月に本学主催の高校生対象のオープンキャンパスにおいて、LDとコンピュータによるテキスト処理を使って、45分ほどの授業をおこなった。おおむね好評だったのではないかと考えている。このとき使ったアイデアとMDレコーダを使用することをドッキングさせて、この授業案を考えてた。1995年6月に行われたLLA九州支部大会のLL講習会における発表のために、実際、筆者自身がMDレコーダを使って、音声教材を編集してみて、その操作性の良さ・短時間での処理・音質の素晴らしさなど驚くべきものがあった。テープレコーダには、筆者も長年お世話になってきたが、こと編集のみを取り上げてもMDレコーダに一分の利があると思う。

MDレコーダ・MDとテープレコーダ・カセットテープとを比較したときのメリット・デメリット

<メリット>

1. 編集作業に失敗はつきものであるが、その修正が簡単ですぐにもとに戻すことが可能。
2. デジタル編集できるので、何度作業を繰り返しても音声の劣化がない。
3. メディアがコンパクトで、持ち運びに便利。
4. メディアの耐久性がいい。(半永久的。繰り返し録音再生にも耐えられる。テープの伸びなどがない。など)
5. テープの編集のように、音の被さりがない。テープでの録音の場合は録音したものが連続音である

ため、発言と発言の間が短いときには、テープレコーダの機械の機構上どうしても区切りの前後の音が重なってしまう。しかし、MDデジタル録音の場合は、rehearsal機能によって微妙な間隙を見つけ、きちんと区切りを入れていくことが可能である。

6. デジタル録音であるため、瞬時の頭出しが簡単にできる。授業で使う場合、時間のロスが少ない。例えば、学生にテキストの1パラグラフを1回聞かせ、その後1文ずつ区切って1回ずつリピートさせ、最後にもう一度全体を聞かせよう計画していたとする。テープの場合、そのようにプログラムしてテープを作る。しかし、リピートにおいて、ある1文のリピートが不十分で、もう一度その文のリピートをさせたい場合には、巻き戻しと頭出しの作業が入ってくる。これはロスタイムである。このようなことが1回ではなく数回あればそのロスタイムはどんどん増えていくのである。MDを使えば瞬時に繰り返したい部分に戻れるので、ロスタイムはない。授業進行にとぎれがない。これは授業者にとって大きなメリットであろう。

<デメリット>

1. テープレコーダに比べると機器が若干高価である。(ほぼ同等と考えられる)
2. メディアが高価。(実勢価格いうと、60分録音用がカセットテープの場合150円~250円、MDの場合700円~900円で、最大6倍程度である。しかし、メディアの価格競争によって、低価格化が考えられる。また、耐久性を考えあわせると、一概に高価であるとは言えない。)
3. 録音時間が最大74分までに限られる。
4. 振動による音飛びの可能性が考えられる。(しかし、半導体を使った「音飛びガードメモリー」によりほとんど影響はないと考えられる。実際筆者も使ってみて、音飛びは経験していない。あくまで可能性として考えられるものである。)
5. 普及率が低い。(CDの普及率を考えると、これから急速な伸びは期待できる。)

<両者互角>

1. 持ち運び
2. 操作性

カセットテープとMDの使い分け

カセットテープは、その手軽さ・低価格化・普及率から考えて、まだまだ利用価値があり、MDをマスター録音用に、カセットテープは学生の自習用にと使い分けを考えればよいことで、何もカセットテープを否定しようというものではない。実際、本学のLLもカセットテープを使ったものであるので、LL教室で学生が個人練習用にMDを使用することはできない。

教材編集の面から考えると、MDの方が数段便利であるというだけである。また、マスター録音の劣化が極力少ない上に、頭出しが便利で速いという理由で、教材提示用としてはこのうえないメディアであると言える。

今後の発展性

今回筆者が使ったMDレコーダは据え置き型のものであったが、いわゆる「ウォークマン」型のポータブルMDも普及しつつある。この「MDウォークマン」を持って戸外に出れば、前述の野村助教授がおこなっていらっしゃるように、海外でニュースやトーク番組、各局のステーションコール、天気予報、CM、街角の声、アナウンスなどを録音・編集し、世界に一つしかない「生きた英語教材」を制作することが可能になる。これから語学研究者や語学学習者にとって、MDレコーダは強い見方になってくれると思う。それはMDのデジタル録音による頭出しの瞬時性・繰り返し録音再生に対する耐久性などの特徴に負うところが大きい。語学学習にとって繰り返しの重要性は今更言うまでもない。それを側面からいや前面からサポートしてくれるものだと筆者は期待している。

技術革新の成果とLL教室の利用

以上のような技術革新の成果を駆使して最も効果的に編集をおこなえ、また最も効果的に学習をすすめられる場合はLL教室だと考える。ここ数年LL教室そのものの哲学にも変化が見られるように思う。テープレコーダのみを使ったシンプルなラボからコンピュータを導入したより多機能・多目的なスペースとしてのラボに変化してきているように思う。教員側からすると、この変化が操作の複雑化を生み、本来使いやすくなければならないはずのLLがかえって使いづらい代物になっている。ここにLLの利用率が上がらない一つの原因があるだろう。

LL開発会社に望みたいのは、利用者(教員)の機器への習熟度により、ボタン一つで設定の切り替えができるものを作って欲しい。例えば、初心者用設定では基本的な操作のみ、中級者用設定では基本プラスアルファ、上級者用設定では使用者のカスタマイズが可能という具合にすればよいと思う。極端な言い方をすれば、現在の機種のはほとんどはカスタマイズ仕様であり、「カスタマイズができる人はなんでもできるが、機能をマスターするまで何もできない。すなわち、面倒くさくて使わない。」という構図ができあがる。誰でも使えるものが一番よいものだと思う。これはLL開発会社でも考えているであろうから、技術は進むと思う。LL教室という形で学校に入りはじめた初期から比べれば使いやすくなってはいる。より一層の努力をお願いしたい。筆者が注目しているのはMDと同じ光磁気ディスクのMOを使ったLLコンソールであるが、学習者主体で考えるならば、学習者側のブースに持ち帰って利用できるメディアをつけて欲しかった。学習者側では普及率からいって、現在はカセットテープになるであろうが、将来MDという選択も考えられる。

時代と共に技術はどんどん新しくなって行くが、教員が陥りやすいのは機械の虜になってしまうことであろう。確かにすばらしい機械であっても、それを使う者が何の目的で、どう使いたいのかというコンセプトを持っていなければ、ただ機械に使われている技術屋になってしまう。学習内容があって初めて、機械の存在理由が成り立つのである。決して機械が主体ではない。

英語教育において、いや広く語学教育において「音声」を除いた教育は考えがたい。語学教育者としては学習者にできるだけクリアな音声を生のまま、たくさん聴かせたいものであるし、また聴かせるべきである。録音教材があれば繰り返し再生する必要がある。録音・再生の繰り返しの耐えられる耐久性と「音」の劣化のなさ、操作及び持ち運びの簡便さから考えて、現時点ではMDという選択は間違っていないと思う。

すぐに消えてしまう音声を記録しようとすく試みは多くの人々が志したであろう。その中でエジソンの成功に始まり、人類はどんどん技術を高め、発達させてきた。レコード・レコードプレーヤが生まれ、テープレコーダ・磁気テープの発明され、小型化・低価格化で家庭に普及し、ビデオの開発により音声だけでなく画像までも記録できるようになった。アナログからデジタルへの流れの中で光磁気レコーダ・光磁気ディスクの発明があり、これもまた小型化・低価格化で普及しようとしている。光磁気ディスク及び装置も、CD(CD-ROMも含む)、LD、MD、DVDなど現在多種多様なものが出ているが、それらの機械・メディアに振り回されることなく、それぞれの特徴を知った上で、常に語学教育という視点からどんな欲に使えるものを選択していかなければならないと考える。

こう考えてくると、本稿で取り上げたMDにしてもコンピュータにしても一つの通過点にしかならないかも知れない。数年後には確実にもっと使いやすいものが現れるであろう。筆者もそのような機器が現れることを心待ちにしている一人である。それと同時に機器がいかに変わろうとも、「それを使う主体は人間である」という自覚=主体性を確立しておくべきであり、常に語学教育という視点に立って、その機器を使う目的を明らかにしておかなければならないと考える。

<参考資料>

以下は、クローズドキャプション信号を、アップルコンピュータとEnglish at Easeを使って取り込んだものをクラリスインパクトでテキスト処理したものである。少し長いが、引用しておく。行頭の数字と誰が言ったセリフかを表す役名は、筆者が付したものである。

この場面は、FrankとRachelのデートの場面の会話である。(＃0と＃1とは分離が不可能であった。)

-----全文-----

- 0 Waitress: Another beer, sir?
- 1 Frank (以下Fと表す): No, no, thanks.
- 2 Rachel (以下Rと表す): Your kind of place?
- 3 F: Yeah.
- 4 R: Your kind of music?
- 5 F: Absolutely, yeah.
- 6 R: You figure no one can get by you here, huh?
- 7 F: Someone's willing to swap his life for a killing, nothing can stop him, Rachel.
- 8 R: Well, great.
- 9 What do I need you for?
- 10 F: He might get me instead.
- 11 R: And you're ready to die for me?
- 12 F: That's the job.
- 13 R: And you'd do it?
- 14 Why?
- 15 F: I can't sing.
- 16 R: Well, maybe there is some glory in saving a president or somebody, but just anybody?
- 17 F: You mean like you?
- 18 R: Yeah, like me.
- 19 F: It's a matter of conditioning and discipline.
- 20 R: I don't trust discipline.
- 21 I know at that crucial moment I'd cop out.
- 22 F: It happens.
- 23 R: Mmm, but not to you, fierce Frank, huh?
- 24 F: It happens.
- 25 R: So have you ever liked anybody?
- 26 F: What do you mean?
- 27 R: Like me, a girl.
- 28 F: Yeah, a long time ago.
- 29 R: Hmph. What happened?
- 30 Do you mind if I ask?
- 31 F: You mind if I don't answer?
- 32 R: I don't wanna pry.
- 33 F: Oh, yeah, I can see that.
- 34 R: What, she didn't die, did she?
- 35 While you were protecting her, she got killed, right?
- 36 God, that's not it, is it?
- 37 That's it, isn't it?
- 38 F: Nobody's perfect.

- 39 R: I'm sorry, Frank. I'm sorry.
 40 F: No. Nice try though.
 41 R: You--Frank.
 42 F: It was less dramatic than that.
 43 She didn't love me anymore.
 44 Can you imagine that?
 45 R: No, not really.
 46 So, is this a full service date, Frank?
 47 I'm just asking you to dance.
 48 Come on. You can dance, can't you?
 49 This is kind of a cowboy song, huh?
 50 F: Yeah.
 51 What?
 52 R: Nothing. It's nothing.
 53 F: What?
 54 R: I mean, it's so depressing. Have you listened to the words?
 55 F: It is kind of depressing.
 56 R: Yes, it is.
 57 It's one of those "somebody's always leavin' somebody" songs.
 58 F: Yeah.
 59 R: Don't worry. Don't worry. I'll protect you.

(1992 Warner Bros. ALL RIGHTS RESERVED)

WORK SHEET の例

SCENE 2

[解説：フランクが誘ったのは、いかにも野暮ったいカントリー酒場。でも結構幸せそうなレイチェル。二人とも酒を飲みながら、フランクの過去の話になる。]

TASK 1 (PARTIAL DICTATION) : PUT A SUITABLE WORD INTO A BLANK.

RACHEL: So have you ever liked anybody?

FRANK: What do you mean?

R: Like me, a girl.

F: Yeah, () () () ().

R: Hmph. What happened?

Do you mind if I ask?

F: You mind if I don't answer?

R: I don't wanna pry.

F: Oh, yeah, I can see that.

R: What, she didn't die, did she?

While you were protecting her, she got killed, right?

God, that's not it, is it?

That's it, isn't it?

F: () ().

- R: I'm sorry, Frank. I'm sorry.
F: No. () (), though.
R: You-- Frank.
F: It was less dramatic than that.
She didn't love me anymore.
Can you imagine that?
R: No, not really.
So, is this a full-service date, Frank?
I'm just asking you to dance.

[WORDS & PHRASES]

1. pry : to try to find out about someone else's private affairs (LDOCE)
2. a full-service date : this expression has a special meaning.
cf. To service: of a man, to have sexual intercourse with (a woman)
(OED Supplement)

[微妙なニュアンスを持つ表現である。Rachel があまりに真面目なFrankをからかってみたのだ。実際、Frankはこの言葉を聞いて、どぎまぎしている。]

[Expressions]

1. Do you mind if I ask?
mind: to be upset by; to object to
cf. Do you mind -ing ...?
2. though : *adv. however: I wish I hadn't done it, though.*
(Chambers Universal Learner's Dictionary)

TASK 2 (COMPOSITION): PUT INTO ENGLISH.

1. ここでタバコを吸ってもよろしいですか。
2. この書類は今日の5時までに提出しなくてもよろしいですか。
3. 「すみませんが電灯をつけていただけませんか。」「はい、いいですとも。」
4. 「そのイヤリング他のとかわりばえがしないけど。」「でも値段は高かったのですよ。」
5. よく分からないけれど、それが私には一番簡単(なやり方)だと思う。

学籍番号 () 氏名 ()

<使用機器・ソフトウェア等>

1. MDレコーダの機種： SONY MDS-501
2. LDプレーヤの機種： SONY MDP-605
3. クローズドキャプションデコーダの機種： FUTEK VIDEO CAPTION ADAPTER FA-710
4. LLコントロールコンソール： SONY LLC-9000 System
5. クローズドキャプション信号読み込みソフトウェア：
 (株)スリースカンパニー English at ease Light version1.0 機能限定版, 1992. テキストの読み込みだけが可能
 (代替えとして, Sanyoからマッキントシュ用ソフト付きクローズドキャプションデコーダが低価格で発売)
 (コンピュータが使えない場合スクリーンプレイ出版から出版されているSCREEN PLAYシリーズを使うこともできる。主要な映画のシナリオはこれで手に入れることができる。話題の映画をいち早く取り入れようとするコンピュータとLDの組合せが最も良い。)
6. レーザーディスク "The Bodyguard", Warner Bros., 1992.
 発売元：ワーナー・ホーム・ビデオ (NJL-12591)
7. テキスト編集用ソフトウェア： クラリスインパクト 1.0v1, クラリス社, 1994.

<参考文献>

1. 野村和宏・東淳一 (1994), 「ワークショップ・ハンドブック 音声教材の効果的な編集と提示：ミニディスク (MD) の活用法」, 語学ラボラトリー学会 (LLA) 関西支部事務局
2. 保崎則雄・鈴木広子・井上洋 (1994), 「視線運動分析による英語キャプション, ナレーション付き映像の理解を高める学習システムの構築」『語学ラボラトリー学会 (LLA) 第34回全国研究大会発表論文集』, 語学ラボラトリー学会 (LLA), pp.54-56.
3. 杉森直樹 (1994), 「映画教材を用いた発音指導--Interactive Videoによるマルチメディア教材の開発」『語学ラボラトリー学会 (LLA) 第34回全国研究大会発表論文集』, 語学ラボラトリー学会 (LLA), pp.64-67.
4. 杉本義美 (1994), 「LL授業の活性化のために」『語学ラボラトリー学会 (LLA) 第34回全国研究大会発表論文集』, 語学ラボラトリー学会 (LLA), pp.106-108.
5. 田中豊雄 (1995), 「光ディスク (CD/LD/MD/DVD等) 技術の近未来」『語学ラボラトリー学会 (LLA) 第35回全国研究大会発表要綱』, 語学ラボラトリー学会 (LLA), pp.24-27.
6. 藤枝美穂 (1995) 「映画を利用したLL授業--デジタル編集によるビデオ教材を使って--」『語学ラボラトリー学会 (LLA) 第35回全国研究大会発表要綱』, 語学ラボラトリー学会 (LLA), pp.43-44.
7. 花岡昭男 (1995), 「LLのあけぼの」『LL通信184』, ソニー株式会社 システムビジネスカンパニー システム営業推進部, p. 16.
8. 高村宗治 (1994), 「野村流MD教育が伝えるメッセージ」『CAT CROSS AND TALK11, 1994』株式会社アルク, pp. 12-13.
9. 高村宗治 (1994), 「学習者の目で見えたマルチメディア教育最前線」『CAT CROSS AND TALK11, 1994』株式会社アルク, pp. 14-17.
10. ソニー株式会社 (1994), 『SONY MDS-501取扱説明書』
11. 新田晴彦 (1994) 『スクリーンプレイ学習法』, スクリーンプレイ出版
12. 渡辺幸俊・Perkins, Bruce A (1995), "THE BODYGUARD WORKBOOK", スクリーンプレイ出版
13. 磐崎弘貞他・スクリーンプレイ編集部編集 (1995), 『映画英語教育のすすめ』, スクリーンプレイ出版

